

# 満州

## みどり子を守り祖国に生還

北海道 坂田 美佐子

私が結婚したのは昭和十九年十月二十八日です。当時、私は満拓の牡丹江地方事務所開拓課に勤めていた主人と、なに不自由のない幸せな生活をしておりました。

日本国内では戦況が厳しいとのニュースも、異国で聞く私たちには想像もできないほど平和な日々でした。夢のような幸福な新婚生活が三カ月すぎたある日、突然、地方事務所の兵事担当の遊佐様が見えられ、主人と外に出て行きこそこそと話をしているのです。やが

て主人が家に入ってきました。私は「何かあったの？」と不安な気持ちを押さえて聞いたところ、主人は「いや何でもないよ」と言いましたが、私は主人の顔が引きしまっているのがはっきりわかりました。そして、召集令状がきたのだと直感しました。私は心臓の鼓動が止まるようなショックを受けて、主人が何か言っているのですが、私には何も聞こえませんでした。

昭和二十年二月二十八日、主人はまだ夜の明けぬ早朝に、泣き叫ぶ私の声を背に、一人寂しく奉公袋を風呂敷に包んで去って行きました。それが、日本の敗戦をはさんで五年もの間会えなくなる主人との別れでした。結婚してわずか四カ月目でした。

それからの私はただ一人、身内のいないこの満州の土地で生きていかなければなりません。気持ちのうえ

では軍人の妻になったのだと自覚しても、身内一人いないこの満州でこれからどう生きてゆくのか、ただそれだけを考えて毎日毎日泣いてばかりいました。

一カ月ほどたったある朝、突然めまいを感じて起きあがることもできずに床についていましたが、屋近くになんとか隣の社宅に助けを求めて病院に連れて行っていたきました。診断の結果は妊娠でした。一瞬耳を疑い、うれしいというよりどうしてよいかわかりませんでした。

牡丹江の町の様子も一日と変わり、ただならぬ雰囲気が出てきた昭和二十年八月八日、ちょうど大詔奉戴日でした。私たちの社宅でも毎月行われている隣組の常会があり、夕食もそこに全員集まりました。その常会に出席して驚いたことは、男の人は一人もおらず、ただ女と子供ばかりの集まりだったことです。牡丹江地方事務所の社員はほとんど兵隊に駆り出されて、残っている日本人の男の人は、お年寄りか病人ぐらいで、不安は募るばかりでした。

でも若い私は、戦局は最悪の状態にあるとは考えて

もおらず、常会の終わったその夜は十時ごろ帰宅し、昼間の疲れもあって熟睡して、夜明けに「ドンドン」と戸を叩く音にとび起きました。それは空襲の知らせであり、なにがなんだから寝られないままに寝ぼけ眼で戸をあけて、南の方向の空を見上げて驚きました。夜明けの空に黒々とした大きな鳥のような巨大な物体が「ゴウゴウ」という爆音をたてているではありませんか。初めて経験する空襲です。もうどうしてよいか、ただうろろうろ家の中を歩き回っていました。

そのときです、社宅の方々が土足で入ってきて怒鳴る声でやっと我に返り、身支度をし、リュックサックを出して手あたりしだいに詰め込みました。そのときの私は、お腹の中に八カ月の長女がいたのです。後で気がついたのですが、夢中だったためか無意識にお産に必要な物ばかりをリュックサックに入れていたのです。

忘れもしない昭和二十年八月九日、ソ連参戦の発表を聞いた日です。大きなお腹をかかえて丸一日防空壕の中に入っていました。そのころ東満国境の東寧・

東安から続々と日本人の避難民が牡丹江の町にだれ込んできました。どの日本人もみな裸同様で肩・腕・足のところどころに布がついているだけ。爆撃による爆風でちぎれたらしく肌は血で染まり、見るも無惨な姿でした。

社宅に収容された、負傷した日本人の避難民を、私たち社宅の奥様方が治療にあたりました。時間がたつのも忘れていましたが、十日の朝方フライパンで炒ったお米をポリポリ食べ、水を飲んでお腹の中に流し込みました。これから私たちはどうなるのでしょうか。社宅の子供たちは遊ぶことも忘れたようにただおのいているばかりでした。

突然、あるご婦人が立ちあがり、「このままでいても、どうせソ連の兵隊に殺されるでしょう。どうせ殺されるのなら日本人らしく死にましよう」と青ざめた顔で言われました。そのとき私はまだ十九歳、ただ恐ろしさに泣き叫ぶだけでした。そんなときに頭に浮かんでくるのは父母・弟・妹そして主人の顔です。ポンと肩を叩かれ、我に返ったときはすでに死ぬ話は決まっ

ていました。それは一番大きい防空壕にダイナマイトを仕掛けてそこで全員が自決するという想像もできぬことでした。「最後の晩餐」といって、お互いに家からお米や味噌などあるものを集めて外で煮炊きを始めました。そのときの気持ちは当事者でないと同理解できないことで、私はどのような行動をしたのか、今でも思い出せません。夕食もできあがって皆揃って食べようとしたときです。日本の兵隊が、鉄カブトを草で覆い五、六人ドヤドヤと入ってきましたが、あまりのことで皆は立ちすくんでおりました。「貴様たちは何をやっているんだ。もうそこまでソ連の戦車がきているんだ。すぐ逃げろ」と怒鳴っているのです。集まった社宅の人たちは、クモの子を散らすように持っていた茶碗やお箸を投げ捨ててわが家に帰り、全員脱出することになりました。

銘々リュックサックを背負い、子供の手をしっかりとつかみ、牡丹江駅検車区を目指しどんだん歩き始めました。そのとき、牡丹江の中心街に黒煙があがっていました。私も遅れじと後に続いて行きましたが、二

度と帰ることはないであろう社宅を振り返り振り返りしているときです。突然頭上に爆音が響き、何か光ったと思った途端に、地面にところかまわず機銃掃射の弾が雨のように降ってきました。どこからか「伏せろ、伏せろ」という声がして、皆はリュックサックをかながら捨てて地面に伏せたのですが、私は八カ月の身重で伏せようにも伏せることはできません。瞬間リュックサックの重みで尻もちをついたきり身動きがとれず、おおむけになったままの状態でこちらに向かってくるソ連機をにらみつけていました。キーンという機銃掃射の音とともに五センチ間隔で、弾が雹のように飛んでくるのです。必死になって弾を避けるため、体を左右に動かすのが精一杯でした。ほっとして左右を見たところ、さっきまで元気で行動をともしていた人が、もう数人帰らぬ人になっていました。

われに返ったとき、ソ連機は雲の彼方に消え、私たちは急いでまた目的地である検車区に向かって黙々と行列を作り歩き始めました。すでにソ連機の爆撃で牡丹江駅は直撃弾を受けてメチャメチャに破壊されてお

り、あちこちから火の手があがって黒煙に包まれておりました。

検車区に近づくころ、列車がきましたので皆は歓声をあげ元氣百倍にして、今までの疲れも忘れて夢中で走り出し、われ先にと列車に乗り込みました。列車といっても貨車で床には汚いムシロらしいものが敷いてあるだけです。「どんどんつめる」という声で押し込まれ、やっと座るだけの満員状態で扉が閉められましたが、貨車の中は真っ暗でした。ただ上の方に小さい窓があるだけで何をするのも手探りでした。

どのくらいだったかわかりませんが、気がついたときは列車は動いておりました。この列車はどこに行くのか、どの方向に向かっているのか皆目不明です。外を見ることもできません。ただ子供の泣く声だけが聞こえてきます。不安は募るばかりです。だれかがマツチを擦ったらしく車内はパアッと明るくなりましたが、光が外に洩れるとのことですぐ消されてしまいました。列車の動く音だけでだれも声を出さずはおりません。ただ黙っているだけです。

おそらく四日目だと思えますが、急に列車が止まって下車を命ぜられました。だれかがここは吉林だと教えてくれましたが、全員疲れきって声を出す人もいません。皆の顔は青ざめて憔悴しきっています。私たちは牡丹江の満拓関係家族は、吉林の地方事務所に連れて行かれました。吉林の町はまったく平静で牡丹江の爆撃が嘘のようです。ここでは満拓社員の方からの親切に接し、お世話になることになり、これで助かったと胸をなでおろしました。

何日かぶりに畳に座りくつろいでいたところ、「ただいまより、重大放送がありますから、お集まりください」という声があり、私たちは、何のことかわからないままラジオの前に集まりました。生まれて初めて聞く天皇陛下の声です。内容はハッキリわかりませんが、日本が戦争に負けたということだけはわかりました。

ようやく東満から逃げてきたのだと思うと精も根もつき果てて、全員地面に泣き崩れてしまいました。その後の吉林の町は暴動の町に一変し「日本人は皆殺し

にする」というデマまでひろがり、だれ一人として外出することができなくなりました。私たちの収容されている日本人小学校にもソ連兵の乱入が毎日のように続きました。夜になるとソ連兵は、私たち避難民の日本人女性を獣のように求めてくるのです。私たちは教室に七、八十人ぐらいで雑魚寝をしているのですが、侵入してきたソ連兵に、だれかが必ず連れて行かれました。その恐ろしさは、ただ恐怖という文字で表現できるのみです。このようなことが毎晩続くのでは、日本女性のごとく汚されるということで、日本人会の対策としては、収容者中の慰安婦の方々にお願いするよりはかはないということになり、代表の方が慰安婦の方に「私たち日本人女性を救ってください」とお願いしたところ、しばらくして一人、二人と十人くらいでくださいました。その方々には誠に申し訳ありませんでしたが、そのときは日本人女性を助けてくださったという感謝の気持ちと同時に、そのご婦人が神々しくさえ感じました。その晩その方々は、きれいな着物で飾り、私たち全員が涙の「君が代」を歌って送り

出しました。

このような生活が一カ月あまり続きましたが、これ以上吉林にすることは危険とのこと、他の收容者の方々には申し訳ありませんでしたが、私たち満拓社員の方は、新京の満拓本社と連絡をとり、十月初旬に満拓に関係のあった親日派の満人の警備のもとで新京に出発しました。新京駅に着いた途端、満人が棒を持って列車の窓を破り、なにか怒鳴りながらなだれ込んできました。そして錆びたナイフで私たちの持っている最後の財産であるリュックサックを肩から切り落として列車の窓から投げ捨てたのです。私も喉にナイフを突き付けられました。死んでもお産用品が入ったリュックサックはとられまいと必死に抵抗しましたが、ついにとられてしまいました。ホームに降りた時は、無一文で手には何も持っていません。もう立つ気力もなく泣けて泣けてしょうがありませんでした。

なんとか皆さんに助けられて満拓本社に到着しました。社員の方から「さぞ大変でしたでしょう、よく頑張ってください」との慰めの言葉をい

くと同時に、「会社も終戦で何も満足なことではできませんが、できるだけのことばせてもらいます」という激励の言葉を頂戴して、新京での新しい生活に入りました。私たち牡丹江地方事務所の家族は西順天区の家族寮（慈光寮）に收容されました。そこは四畳半一間に、二家族か三家族が收容され、私は身重ですが一人でしたので畳一枚だけで、そこに薄い毛布を敷いて寝起きました。これが私の住み家でした。

やがて秋も過ぎ寒い冬が近づいてきました。どうやってこの冬を越すべきかと、皆で毎晩話し合いをしました。結局、生きるためには行商部隊をつくり、二人一組になって町に売りに行くことになり、私たちはお豆腐とお餅を作り、一軒一軒歩いて売りました。満州は十月の下旬ともなると肌寒く、町に立っていても身を切られるような寒さです。でも皆は故国日本に帰れることだけを唯一の希望として生命の限りに頑張りました。

忘れもしない昭和二十年十月二十四日の夜明け、私は長女を無事出産しました。でも初めて見る我が子は

産湯どころか布で拭いただけ、着るものといっても日本人の皆さんが大事に持ってきたヨレヨレの浴衣をいただいて縫った襦袢だけです。平和なときであれば両親の手元で祝福され暖かい産着に包まれて「蝶よ花よ」と大事にされていたことでしょう。何も知らないで眠っている娘を見ると、かわいそうでかわいそうで涙が止まりませんでした。戦争さえなかったら主人とともに喜びあっていたことだろうと、このときほど戦争を怨んだことはありません。でも母として精一杯頑張ってきたのだから我慢してねと心の中で娘に言いました。

私はすでに栄養失調にかかっており、肝心のお乳は一滴もありません。娘は空腹を訴え火のついたように泣くのです。私も一緒に泣きました。でも泣いてばかりはいられません。私はどんなことがあってもこの子だけは立派に育てて日本に帰るんだと心に決め、産後五日目でしたが行商にできました。

一日を生きること、精一杯の毎日、だれ一人愚痴をこぼす人はいなくなりました。月日を経るに従い、まわりの子供は栄養失調で、一人一人と次々に亡くなっ

ていくのです。そのたびごとに皆が拾ってきた板きれでお棺を作り、その中に遺体を入れるのです。もちろん葬式などは考えられません。とても悲惨な状態でした。今まで生死をともししてきた苦勞の果ての姿を前にして、それがせめてもの気持ちで一晩お通夜をしてあげました。夜が明けると、日本人を埋めるために用意されたという山（墓地）に持って行って埋めました。遺族になった父母の気持ちは腸がちぎれる思いだっただろうと思わずにはいられませんでした。

ちょうど娘が生後三カ月ほどたったある寒い日でした。その日は、なかなかお餅が売れず、なんとしても娘のお乳代だけはと日の暮れるまで日本人の家を売りに歩きまわり、くたくたになって帰りました。ところが部屋に入るなり、娘の様子がいつもと違うのを感じました。かなりの高熱で呼吸も困難になっているのです。もう夢中になって娘を抱き寮の裏に造られていたソ連軍の診療所に飛び込みました。誰彼の見境もなくただただソ連兵にしがみつき助けを求めました。でも言葉がぜんぜんわからず通じません。ただ「ジンギ

ダバイ、ジンギダバイ」と言っているのです。後でわかったのですがそれはお金を出せということでした。

身一つで逃げてきた私にはお金などあるわけがありません。泣く泣く寮に帰りました。故太田吉雄氏夫人にお金の工面の相談をしましたが、その方も二人のお子さんをかかえ、親子三人が生きるだけで精一杯。どう考えてもできるはずはないのですが、突然思い出したように、奥様が「今は金が高いので貴女の歯に入れては金歯を取って売るより方法がないのでは」と言われました。思ってもいない言葉で私は心の中で「そんなバカなことが……、またできるはずもない」と思っていました。かといって他に売るものといっても何もありません。気がついたときはもう外に走り出していました。

歯医者といっても何の設備もない汚い満人の家です。とにかく一本だけでも取ってくれるように頼みましたが、満人は全部取ると言って、もちろん麻酔もなくなだ釘抜きのようなもので金をはがし取ったようでした。もうそのときは痛みより、「ああ、これで娘を病院に

連れていける、これで娘が助かるんだ」という思いで夢中でした。その際歯を何本取ったのか思い出せません。またいくらお金をもらったのかもわかりません。でもあのときの痛みは一生忘れることはできないでしょう。そのおかげで十分な治療ができて娘はなんとか一命をとりとめることができました。

厳しい冬も去り終戦からちょうど一年目の八月に、あちこちから日本に帰れるらしいとの噂が流れ始めました。私たちは、大勢の同胞の犠牲があってこそ、今までなんとか生き延びてこられたのだという感謝の気持ちでいっぱいでした。皆、もうすぐ帰国が実現するという気持ちで準備にかかり、明日こそは、いや今日こそはと、帰国の命令を待ちました。

私はどんなことがあってもこの娘だけは必ず連れて日本に帰ると心に決めていただけに帰国の命令がでたときはまるで夢のようで信じられませんでした。

昭和二十一年九月十日に無事佐世保に上陸し、生死を賭けた日本の土を踏むことができました。上陸後ただちに栄養失調の娘を旧海軍病院に連れて行き診てい

ただきました。お医者さんは、今までにこのような骨と皮だけの子供は見たことがないとのことでした。もちろん注射はしてくれましたが注射液が体内に入っていないのです。「もうどうせ駄目でしょうから、一日も早く故郷に連れて行って身内の方々に会わせることですね」と、いとも簡単に言われるのです。でも私はあきらめませんでした。早速その日のうちに汽車に乗り、あてのない車中の人になりました。どのくらい乗ったかは今になっても記憶は定かではありませんが、着いた駅は東京でした。何もない焼けただれた駅に降りましたが、行く当てもない自分が哀れでした。

父は、満拓社員の谷津保夫で終戦時には父母たちは朝鮮にいたので、日本に引き揚げているかは不明です。また主人の実家のことは、本人から聞いていますが記帳していた手帳も新京の駅でとられ、それに戦後の厳しい生活の中で記憶も薄れ思い出すことすらできませんでした。まったく落ちつく先のない私と娘でした。丸一日ホームでリュックサックに腰をかけていました。そのとき子供のころよく両親に連れて行っ

てもらった茨城県のことを思い出し、引揚げの世話をしていた大学生からコッペパン一個をいただいて常磐線に乗ることを教えられました。

翌日の午後だったと思いますが、懐かしい水戸の駅にたどり着きました。しかし水戸の町は艦砲射撃を受けて焼野原、何一つ思い出させる店もなく、ただ私は呆然と立ちすくんでしまいました。食べるものもなく、着ている服は乞食の一步手前に等しい身なりです。あたりの人たちはジロジロ見ているのです。こんな惨めな自分が悲しくて、お腹にくくりつけていた娘を抱きしめて泣いておりました。

そのときです、真白い割烹着を着たきれいな奥様が私に近づき、どこから引き揚げてきたのか、また赤ちゃんが死んでいるのではないかと親切に聞いてくれました。そうして「貴女はここから一步も動くのではないですよ」と言って駆けて行きました。私には何のことかさっぱりわかりませんでした。私には何のこともありませんでしたが、お腹も空いておりませんし、またお金もないのですから動きたくても動くことはできず、ただ地面に座っておりました。何分か

何十分たったかわかりませんが、先ほどの奥様が走り寄ってきて、手には竹の皮に包んだものを私の手にもたせてくれるのです。ああ、あったかいと感じた途端、真っ白いおにぎりが目の前にあるのです。もう何年も食べていなかったようなおにぎりです。お礼もそこそこにかじりつき、娘にもかみ砕いたおにぎりを口に入れてやり、恥も外聞もなく夢中で食べてしまいました。そのおいしいかった味は今でも忘れることはありません。と同時にその奥様の美しい心と顔を思い出します。

夕暮れが迫るまで駅に座っていましたがそのとき、将校マントを着た立派な紳士が、私の前に立ちほだかるように近づき、どこから引き揚げてきたのか、またこれからどこへ行くのかと優しい声で聞いてくれました。夢にまでみた父親に似たおじ様でしたので、この一年間張りつめていた気持ち急が緩み、そのおじ様の胸に抱きついた記憶が今でも鮮明に浮かんできます。私は気を取り直して、ようやく思い出した母の生家の石塚町の瀬谷（元貴族院議員）の名前を告げました。

そのとき、そのおじ様は驚いたような声で「貴女は瀬谷様のお孫さんか」と急に態度を変えて私の荷物を引たくるようを持ち、私鉄の汽車に乗せてくれました。日もすっかり暮れて九時過ぎだったと覚えていますが、そのおじ様は潜り戸を開けて大きな声で「満州からのお客様ですよ」と呼んでいるのが他人事みたいに感ずるくらいに身も心も疲れ果てておりました。奥から懐かしい叔父夫婦がとんできて「お前は美佐子か、本当にお前は生きて帰ってきたのか」と何度も私の体を揺るのですが、その声が急に遠くなってきたような気持ちになった途端に、私は意識不明になってしまいました。気がついたときは私はきれいな浴衣を着せられ、またそばにいた娘も真新しい着物を着せられてスヤスヤと眠っておりました。恥ずかしいことですが牡丹江脱出以来お風呂なんか一年も入ってないので、体も頭もシラミだらけでした。お風呂に入れていただきましたが、お湯が熱いのか、ぬるいのか感じないのです。娘は生まれて初めて入るお風呂に恐怖を感じたのか、火がついたように泣き出す始末です。

その夜は一年ぶりに温かい布団に寝かせていただき、死んだようになって寝込んでしまいました。翌朝私の耳元で「お母様がきたのよ、お母様がきたのよ」とどれかが叫んでいる声で目を覚ましました。慌てて娘を抱き廊下に出た途端、もう一生会えないときあきらめて

いたあの懐かしい母が裾を振り乱して走ってくる姿が目に入りました。もう夢中で母の胸にすがりつき、自分が一人の子供の母であることを忘れ、思いきり泣きました。母の懐で泣いたのは子供のとき以来で、あときの母の温かい体臭は今でも懐かしく思い出されまです。そのときです。母はやっとわれに返り「この子は美佐子の子供か、よくまあ生きて連れてきたね。よかった、よかった」と何回もくり返していましたが、あまりにもやせて泣く気力もない初めての孫に驚き、そのまま抱いて外に飛び出したのです。私も後に続き入ったところは病院でした。田舎の病院ですから、お医者さんは娘のやせこけた姿にただ驚いて診てくれないのです。「命のある子でしたら、このまま早く貴女のお父さんやらご兄弟に会わせるのが一番でしょう」と、

その夜みんなの待っている実家に連れて帰りました。両親も朝鮮から帰国したばかりでしたし、父は公職追放で職もない有様でした。ただ父の実家は地主でしたので、何とか食べることに不自由なく元気な姿で私を迎えてくれました。

その夜は、牡丹江からの長い苦勞話を聞かせましたところ、家族のものは皆泣いて聞いてくれました。そして「坂田（主人）はどうしたのか、牡丹江はソ連軍が侵入して、日本人は竹槍を持ってソ連軍と応戦して皆殺しになったニュースを聞いたのだが」と尋ねられました。そこで、二十年八月五日に牡丹江で軍服姿の主人に会いましたとき、主人は「これから部隊は鏡泊湖に移動するので、原隊（掖河）に保管してある戦時被服を届けるため牡丹江市長に会って、国際運輸の馬車三十台を徴発して出発する」と言い、その時私に「お前を早く朝鮮の父母の膝元に帰したかったが申し訳ない。これからも苦勞をかけるが、とにかく牡丹江を脱出して南下して日本に帰ってくれ、必ず俺も帰ることを約束する」と言って別れたことを話しました。

そして「主人は音信不通ですから、おそらくシベリアに抑留されている」と答えました。家の人たちは私を慰めてくれるのですが、この苦労は私だけが知っている苦労です。死線をさまよう娘をどんなことをしても生かして引き揚げるのだという強い執念と若さがあったので、この苦労を耐えぬいたのだと思います。

実家に帰ってから、母の手厚い看病と栄養に気を使つての食物のおかげで、娘は日に日に良くなって丈夫になりました。私もいつまでもブラブラもできず、働くことを考えましたが、適当な職もありません。とにかくお金が欲しいので、闇米を東京に持って行って売ることを始めました。一日に二往復もすることもたびたびで、体力に任せて頑張りました。あるとき東大近くの交番に連れて行かれましたが、引揚者で主人が未帰還なのと小さい子供がいるということで無罪放免になりました。

いつまでも米の闇屋はできません。ちょうどそのころ、引揚者で夫が未帰還者の人は生業資金が借りられるという知らせがありましたので、それを借りて水戸

の銀杏坂で喫茶店の看板で一杯屋を開業しましたところ、どうやら一人前に成功した途端に、不幸にも水戸駅前開発で道路拡張に引っ掛かり閉店しました。

その後は、主人の伯母に当たる東京の銀座並木通り六丁目の銀座風月堂の家事手伝いをして、主人の帰国を待ちました。幸い主人は昭和二十四年七月二十四日に舞鶴港上陸で復員しました。その間に主人の父は北海道におり、息子である主人の消息を必死になって探していましたが、軍人関係では消息不明で戦死扱いになっていました。主人の父はその当時村長をしていたので、東京に出張の際に満拓会のことを知り、今は故人になられた宮川艇吾様に照会したところ主人はシベリアに抑留されているということがわかりました。また私の落ちつき先も義父に教えていただいて、昭和二十三年に私と娘が初めて義父に会えました。

主人が帰国後、茨城を引き揚げて北海道に移り、しばらく主人の実家に落ちつきましたが、昭和二十四年ごろはちょうど就職難のときでした。満拓時代は農産加工業務を担当していたので、その関係の会社を物色

しましたが、引揚者を採用してくれる会社はなかなかありませんでした。幸い学校時代の同期生から北海道庁十勝支庁に欠員があるからきてみないかとの連絡があり、喜び勇んで早速十勝支庁長に面接したところ、引揚者でもあるということで十月十二日採用が決定しました。一時は別居しておりましたが、主人の学校の先輩が市役所におりましたので引揚者住宅が当たり、十二月の暮れに親子三人の水入らずの生活ができました。

役所の仕事の内容は戦後の開拓事業で、満拓時代お世話になった故住永茂義様の指導を受け、生きがいのある仕事に喜びを感じて頑張りました。また幸いにも本庁の上司だった中條猛様・須田政美様もおられて、在満時代の開拓事業を偲び特別の指導を受けました。

その後十勝支庁から上川支庁・宗谷支庁を経て三十七年から本庁に勤務し、五十四年に退職して、現在は北海道農業土木技術指導協同組合に幸い健康で勤務し、かたわら満拓会北海道支部の事務局を担当しております。

以上私の在満時代から現在に至るまでの経過を申し述べました。

私は現在の平和の世の中にあっても、五十年前のソ連侵攻によってあの悲惨な戦場と化した満州の広野で自刃された多数の日本人、特に奥地において骨を埋める覚悟で入植し、楽土を夢みていたのに無惨な死をとげられた多くの開拓団の方々のことは一生脳裏を離れることはないと思っています。ただただご冥福を祈らずにはおられません。振り返ってみれば、戦火の牡丹江から脱出して吉林の避難民生活。次に新京の悲惨な生活・壺蘆島出帆・佐世保上陸・帰国後の生活の確立・安定までの道程はあまりにも苛酷な苦難と恐怖の連続でした。

私は満拓社員の妻として、満州開拓の聖業に捧げた主人の行動、そして戦後の開拓事業を終生の仕事として費やされた努力に対して尊敬の気持ちでいっばいです。

尊い生命を奪う戦争は二度とあってはならないと、戦争を知らない若い人たちに私は声を大にして叫びた

いと思います。

## 回想（家族の軌跡）

北海道 藤原史子

渡満まで

父佐々木明は、明治三十年に北海道瀬棚村に生まれ、貧しい農家で育ったが、向学心やみ難く、苦学のすえ、教員の資格を得たのち、旭川の小学校勤務を経て、大正十二年から旭川中学（現旭川東高）に奉職し、数多くの優れた生徒さんたちに恵まれ、歴史の教員として充実した毎日を送っていた。その間に、旭川の佇立高女を出て、小学校の教員をしていた母ヤノと結婚し、大正十三年には、第一子である長女淑子が生まれ、その後二年おきに宏、孝、保の三人の男の子が生まれた。母は長女出産後に退職して、専業主婦となった。当時、まだ男尊女卑の世の中のこと、男の子三人の誕生は、父をして勇氣百倍、ますます張り切った日々であった

ことは想像に難くない。

父はまたふとした縁から、旭川の慶誠寺というお寺の住職で、ホトトギスの俳人であられた石田雨圃子先生と出会い、ご子息が父の教え子ということもあり、俳句のご指導を受けたばかりでなく、大変目をかけていただいたという。父にとっては、仕事でも趣味のうえでも、また家庭生活でも、貧しいながら一応順調なすべり出しであったと考えられる。

ところが昭和八年に、父は肺結核に冒された。病は重いものではなかったが、やむなく旭川中学を退職し、旭川赤十字病院で療養かたがた、付属看護学院で看護婦さんの養成にあたった。これも一家の生活を考えなくてはならなかった多くの方のご配慮があったものと思われる。昭和九年に、二女である私が、三年後には三女の直子が生まれた。一家が八人だったのは、たった一年の間だった。昭和十三年には、私を大変かわいがってくれた長女が、粟粒結核で亡くなった。女学校三年、数えの十六歳だった。しかし、父は悲しんでばかりはいられなかった。「自分が苦学をしたので、三人の男の